

応が起つたので、食べた本人と看護した筆者とで忠実にデータをとつたまでのことである。

なお昭和22年の秋に山形県北村山郡で起つたヤブシメジ (*Clitocybe acromelaga* Ichimura) による中毒死亡事件に関連し、その中毒症状が40年に50~100人しか患者のない稀病のエリトロメラルギー(肢端紅痛症)とそっくりなこと、又1ヶ月にわたる激痛を訴えたその患者がオゾンの注射によつて僅か10分後には痛みが消失し、数月後には全治したと云う特異な報告(高坂知道: 肢端紅痛症と火の病, 山形県医師会報8号6-7頁, 昭和28年6月)を知っている筆者は、ツキヨタケの中毒にもオゾンの効果があるかどうかを試したかつたが、遂に実験することが出来なかつたのは残念だつた。

○ユノミネシダ伊豆半島に産す(平野日出雄) Hideo HIRANO: *Histiopteris incisa* J. Smith newly found in Izu-Peninsula.

亜熱帯シダの一種ユノミネシダは、外国では印度、ニュージーランド、濠洲、アフリカ、アメリカ、台湾、小笠原諸島等の熱帯及び亜熱帯に分布し、日本では屋久島、九州南部、紀伊半島南部及び伊豆七島(三宅島以南)に分布している。特に紀伊半島南部はこの種の北限地として知られている。然し現在紀伊のものは殆んど絶滅状態にあるとのことである。

筆者は1956年、伊豆半島西海岸、静岡県賀茂郡賀茂村字久須の山間(北緯約34°51')で小群落を見付け、其後この地域を調査した結果、20m×100mの範囲に及ぶ群落地地(A地区)を始め、附近の河畔及び小谷に小群落の点在しているのを見出した。特にA地区のユノミネシダ群落は發育旺盛であつて、高さ約1.5mに及ぶものがある。A地区の真中に細流があり、強い硫化水素臭を放っている。附近の土質は多量の硅酸を含む強酸性土壌である。周囲の樹相はアラカシ、タブノキ、ハゼノキ、リョウブ、ヤマザクラ等より成り、林床はトウゴクシダ、オオキジノオ、コバノイシカグマ、ホシダ等が生じ、比較的明かるくて乾燥している。

この地のユノミネシダは本州で最大の群落と思われる。非常に大型の個体が多く、根茎の發育状況も良好である。勿論この地はユノミネシダの北限自生地である。敢て一報する次第である。

本稿の作成には、静岡大学教育学部の志村義雄氏の御指導による所が大である。謹んで御礼を申上げる。(静岡県立松崎高等学校字久須教場) — p. 184 の写真参照のこと。